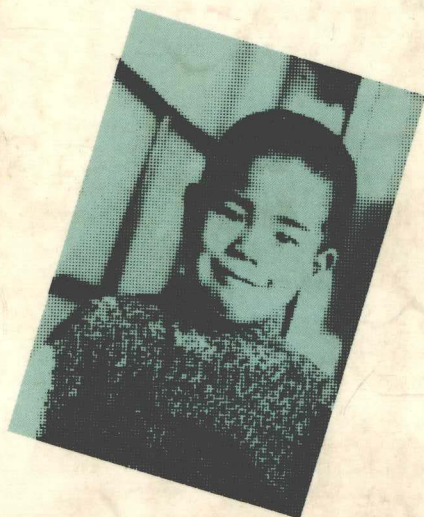


アドリブ自叙伝

野坂昭如



ドリブ自叙伝 野坂昭如

筑摩書房

アドリブ自叙伝

著者〓野坂昭如

発行者〓布川角左衛門

発行所〓株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二―八

印刷〓多田印刷

製本〓鈴木製本

一九八〇年二月二十五日〓初版第一刷発行

〇〇九五―八一―二一―四六〇四

目 次

養父母の思い出……………	7
小学校での初恋……………	22
わが性の目覚め……………	42
戦時下の中学受験……………	63
メンタ電話事件……………	78
迫る空襲の脅威……………	96
三月十七日神戸炎上……………	111

焼跡の赤いスカート……………128

六月五日の惨劇……………146

妹の死と淡い恋……………166

闇市とスクリーン……………185

飢えと盗みの日々……………203

慟哭のB二九再会記……………221

アドリブ自叙伝

装丁
和田
誠

養父母の思い出

一

十六年以前のことになる。長女誕生の際、いろいろ取乱し、気持を落着けるために、育児書や、乳幼児の病気について、専門書まで読みあさり、あげく、どうやら子供なんて、かなりほっておいても、けっこう育つものらしいと、いささか無責任に多寡をくくり、それでも、少ししゃっくりが続くと、おびえ、授乳時にむせれば、どこかに欠陥があるのではないかと、心配はする。

二番目になると、かなり無責任、気楽な感じで、またあれほど、一生懸命読んだはずの乳幼児に関する知識一切合財、きれいに忘れてしまっていることに、おどろきつつ、それを補う気もない。猿にかも似るその顔形をながめては、二十歳まで、面倒みるとして、こっちは六十二の勘定、やれやれとしんどくなるし、その頃、人類はいつたいうたうなっているかと、考えたところでせんかたな

いことに、ふと思いを馳せる。

これは、孫に対する気持と、よく似ているのではないか。つまり、次女については、もはやその人生について、親としての責任のとりようがない、一つにはこっちの年齢のせいでもあるし、また、今や月並みの、エネルギー、食糧の枯渇、環境汚染、なにより核戦争の可能性を考えればとても、次女が結婚し、次の世代をはぐくむ姿など、想像しにくい。

たいへん気楽といえ、気楽なのだ。息子や娘に対し、厳しかった親も、孫には、みなあまくなる。何故かという、責任をとらなくていいからだ、自分の好き勝手な、玩弄物としてみていれればいい、いや、実際にそういう意識はないにしろ、心の底には、孫が一人前になった時の社会など、自分とまったく関り合いないのだからと、あきらめる、あるいは突き放す気持がある。父親と息子は、しばしばライバルになるけれど、いかに権力欲の強い男でも、孫に対しては、寛容なもので、かりに我を張るとすれば、それはむしろ老化故の、ことであらう。

あまり親馬鹿になるのも、みっともよくないが、まるで孫に対する如く、突っ放してながめるのも、いいことではない。第一、自分の年齢や、また、ことごとしいながら人類の先き行きについての取越し苦労は、昨日今日のことではなく、赤ん坊の顔みたたとんに、こんな考えをいただくのは、むしろおかしい。

自分の年齢を意識する時、ぼくは今だに満年齢が身につかず、数えの方に実感がある。数えていえば、知命を過ぎていて、しかし、さてこの年についても、何を拠りどころに、ふさわしい気持、年に似つかわしい心がまえをいだいていいのか、かなり途惑う、やはりたよるとなれば、自分の父親の記憶である。

一歳から十六歳までと、それ以後と、二人の父親がいるのだが、はじめの方の、つまり養父も、後の実父も、明治三十二年生れ、ぼくに次女が生まれた四十四歳の時、養父は、東京に本社のある日本鉱油輸入販売株式会社、関西支社長であつたらしい。

ぼくが特ににぶかったせい、子供なんてそう父親の職業につき、こまかい関心をはらわれないものなのか、この会社の業務内容について、ほとんど知識がない。社名からみると、石油の輸入業者だし、「コノコ」と名の入った便箋を養父はよく使っていた、「コノコ」の名は、今でもタンクローリーの横っ腹に見ることがあるから、多分、「コノコ」オイルとでもいう、外国の石油資本と結びついていたのではないか。

養父四十四歳の年は、昭和十七年であり、ぼくは国民学校の六年生、そしてこの年の四月に、生後二ヶ月の女の子が、ぼくの妹としてもらわれて来た。

太平洋戦争は、まだ緒戦の段階で、無敵皇軍が、東亜全域にわたり、破竹の進撃をつづけている頃。戦争中にわざわざ養女を迎えるなど、今の常識で考えると、無茶なようにも思えるが、当時は、戦争そのものが、日常茶飯のことで、むしろ、男は成人して後、いつ戦場にとられるかも知れぬ、だから、女の子をえらんだと、すくなくとも養母は考えているようだった。

「昭ちゃん兵隊さんになる頃は、紀久子も学校へ上って、少しは話相手になってくれるわね」と、養母が祖母にしゃべる言葉を、聞いたことがある。

しかし、この女の子は、同年の十一月、腸炎で急死、昭和十九年の初夏、また女の子を養女としたのは、どういうわけだろうか、この頃になると、かなり日本の敗色は鮮明となり、なにより食糧事情が悪化して、母乳ならともかく、人工栄養で育てることは、不可能ではないにしろ、ずい分気

苦勞があったと思われる。

それが判っているながら、どうしてももらったのか、養母は、石女だったから、なお子供についての愛着が強かったのだらうし、なまじ女の子を十ヶ月ほど手塩にかけ、育てただけに、あきらめきれなかったのかも知れぬ。

しかし、少しは冷静に判断を下してもよさそうな、養父が、このことを受け入れたのは、どういうわけか。あるいは、孫のようにみてしまったのではないかと、考えられるのだ。戦争の行末は、暗い見通しだし、平均寿命五十歳前後の当時に、四十六歳で、養女をむかえるということは、もう、その子供の将来について、自分がどう思いわずらっても、仕方がないと、あきらめていたのではないか。

そして、戦争が破局にいたるまでの、年月を、一つの縁に結ばれた同士として、生きていければそれでいい、言葉はわるいが、かなり利那主義的感じで、あたらしい娘に対していたような気がするのだ。

話は飛躍するけれど、こんな風に考えれば、政治家たるもの、世間一般についての配慮を、抜かりなく行きとどかせるためには、どうしても三、四十代でなければ、ならないように思える。七十歳になって、まだ十年単位の未来を、肌で感じる人間など、いるはずがない。

若者たちを、孫のようにしかみることのできない連中が、政治の中核にいるから、単なる権力争い、そして、その場限りの政策しか行えないのではあるまいか。

養父は、四十七歳の夏、戦災により死んだ。その死の年齢に、ぼくが近づくにつれて、いちいちひきくらべて、あれこれ考えるくせがつき、その大きな理由としては、どうも養父の方が、はるか

に落着いていて、いかにも大人だったように思え、いちいち養父の言動をもって、わが軌範とするほどではないが、わが暮しさまとひきくらべ、いやはやどうもと、頭をかきたくなるのだ。

少年時代、手近かにいた唯一人の男性だったし、子供心に尊敬の念で見えれば、またその死にかたが突然だったこともあり、ことさら美化してしまうのは、当然だろう。だが、近頃、むやみと、養父について、考えることが多くなり、その生きさまを語りながら、昔のあれこれを、書きつづつてみようと思う。

二

養父は、明治三十二年七月、藤井家の三男として、神戸に生れ、すぐ張満谷家、すなわち、生母の妹の家へ、養子にやられている。この張満谷という姓は、ぼくの調べた限り、姓名辞典にもものっていないし、難読奇姓を集めた本にも見えない。養父の養母、つまり、ぼくの祖母の話では、何代か前は、播州の藩士だったそうで、維新以後、地名にちなんで、この字を当て、姓としたらしい。そして、たしかに、その地方の寺の過去帳を調べみると、俗名の上に、平仮名で「はりまや」と記した場合が、よくある、これは、あたりで比較的裕福な農家や、商家が、屋号で呼ばれていたためといわれ、はりまやは、姓ではないにしろ、一つの地位をあらわしているという、つまり苗字帯刀の身分の下なのだろう。

また、特に「はりまや」の多い地域には、べつの意味で、興味をそえられることがあるけれど、ここではふれぬ。

張満谷家の当主は、船乗りで、三拍手そろった道楽者だったらしい。南洋航路の船長まで勤め、

ふつうなら陸へ上って以後、家作の五、六軒も持って、悠々自適の生活が送れるはずなのに、借金があり、それもかなわなかったし、子供に恵まれなかったのは、悪い病いのせいとも、いわれているのだ。

祖母の末の妹も、船乗りと一緒になっていて、こちらは真面目一方、裕福な暮らしぶり、祖母はよく亭主運のわるいことを歎いていた。しかし、この末の妹も子供に恵まれず、姉の家から養子を迎えている。まったくの偶然だけれど、ぼくの周辺には、養子ばかりがいて、張満谷家から、生家である野坂の家にもどり、そこに継母がいたが、継母もまた養女なのだし、ぼくの姉は、籍だけだが、継母のかわりに、祖母の家へ、養女として、移っていた。

どこの家系でも、こまかく詮索しはじめると、複雑怪奇な一面があるものだけれど、養父にとって本家筋に当る一族のことを調べてみると、まことに興味深い。たとえば、祖母の姉、つまり養父の生母は、六人男ばかり産んで、長男は洋服屋、次男が大工、三男は養父、四男夭折、五男戦死、六男奉天で病死、養父も戦死したから、結局上二人しか残らず、気が強くて「屑ばかり残りやがった」と、息子の前でいうくらいだから、戦後、引き取り手がなく、しごく惨めな死にかたをし、祖母は、養子に先き立たれたあげく、やはり戦後の混乱の中で、あわれな死を遂げた。この死については、ぼくにも責任があるのだが、まだ、筆にするだけの、勇気はない。三番目の妹、この孫が、昭和十七年、張満谷家の養女に來たのだが、あまり幸せではなく、末の妹だけが、まずまともな人生を終えたのだ。しかし、この恵まれた女性にしても、石女だし、養子は戦争中、上海へ渡って、無一文で帰国、財産税納めるために、住まいを売って、家作の一軒に移り、養子は、闇市へ出て稼ぎ、指圧師の真似までして、一家を支えるという苦勞を、味わっている。

戦争があったにしろ、この一族の、特に女性にまつわる因果は、業の深い感じで、たいていの災難は、女の方にふりかかっているのだ。

張満谷家の当主は、養父が県立神戸商業学校五年の時、スペイン風邪で死んだ。帝大へ進学するつもりだった養父は、何分、家に何のたくわえもないから、「大学出に必ずまけないから」と、雄雄しく母につけて、神戸の貿易会社に就職した。大正七年、第一次大戦の末期近くで、戦争が終るとすぐに、大連へおもむき三年ばかりを、この地で過ごしている。

張満谷家は、ぼくが野坂の姓にもどったことで、完全に断絶してしまい、親戚も、すでに代がかわっているから、養父の独身時代については、まったく手がかりが少い。祖母から聞かされた話、その多くは、嫁と仲違いのあけく、孫を相手に愚痴をこぼす中に、息子の若かりし頃の、自慢がまじり、それをいくらか覚えていいるのと、後は、親戚の家にあった、養父の写真から、推しはかるくらいが関の山なのだ。

大正十年と日付けの入っている黄ばんだ写真の、背景は大連の街並みで、養父は腕をくみ、いかにも楽しげに、笑っている。ついに死ぬまで、国民服を毛ぎらいし、美髯をたくわえたままだった、おしゃれの片鱗は、十分にうかがえて、寸分すきのない洋服姿、かなりの美男子である。

だが、何という会社に勤めていたのか判らず、またその間、祖母が一人で何処で暮していたのか、見当つかず、ただ大正十二年九月一日の震災は、養父が東京神田の、岩戸屋という旅館であいい、神戸西のはずれに、祖母はいて、たいへん心配したらしい。

「ベッドに寝てたら、急にドシンと、一尺ほど落ちこんだような感じがあってね、こりゃどっかで大きな地震があったと思ってたら、案の定」と、祖母はぼくに語っていた。

年寄り、手近かのことについて、しごく忘れっぽい、年の盛りの、しかも印象的な事件については、まったく昨日の出来ごとの如く記憶しているもので、自分が直接経験したわけでもないこの震災について、養父から聞いたのか、あるいは新聞画報で知識を得たのか、被服廠跡の模様や、上野へ集った避難民たちの様子、朝鮮人襲撃事件のあらましから、焼跡に生れたスイトン屋、ミシンのオカマを拾って金もうけした人の話など、ずい分よく聞かされたものである。

「三越のエレベーターがとまっちゃってね、乗ってる人は、皆ムシ焼きになったんだよ。だからエレベーターに乗る時は、気をつけなきゃ」といわれ、今でも、ひょいと思ひ出し、乗らずに歩いて昇ることがある位で、読書による影響は、十歳から十五、六歳までにもっとも強く受けるらしいが、四、五歳から、十二、三歳までの少年に与える、祖母の力は偉大なもので、ぼくの、教養の基礎は、祖母によって培われたといってもいい。

祖母は、名前をことといい、明治十年東京で生れた。すぐに神戸へ来たらしいのだが、小学尋常科卒えると、また東京へもどり、麻布の、華族の屋敷へ、祖母の表現によれば「行儀見習い」ということで、奉公している。多分、生家が貧しかったせいだろう、祖母の父は、日本橋に住む腕のいい仕立て職人だったらしいが、これも酒に溺れて、女四人男一人残して早死している。

父の死をみとったのは、ことと母だけだったそうで、最後の脈の具合いを、「トントントンと早くうって、ひょいと止ってしまふ、ああ、駄目かなと思っていると、またトントンとはじまって、だんだん早くなり、止る。こういうのをしばらくくりかえしているうちに、ゲフツというような息をして、喉をごろごろさせて、しずかになっちゃったの。最後っ屁っていうのかね、後で、くさいおならをして」